大学生の衣生活自立度の実態調査

大矢幸江[1)]，薩本弥生[2)]
1：昭和学院短期大学，2：横浜国立大学教育学部

Self-supported degree survey in clothing life of college students

Sachie OYA[1)]， Yayoi SATSUMOTO[2)]
1: Showa Gakuin Junior College　2: College of Education , Yokohama National University

1. 緒言

大学生は、小学校・中学校・高等学校まで日本の学校教育において家庭科を学んできている。家庭科の衣生活に関わる被服領域では、小学校で保健衛生的機能の学習を、中学校では社会的機能について学び、高等学校では小・中学校での学びをさらに掘り下げた学習を行うことによりスパイラル的に学習内容の定着を図っている[1)2)3)]。現在の大学生は、2008 年 2009 年改定の学習指導要領によって学習しており、今年度より順次小学校から改正されていくが、その基本的方針は変化していない[4)5)6)]。大学生は小学生から高校までの継続的、体系的な学習によって[7)]、被服に関わる知識と基本的縫製技能を身につけていることを期待されている。

一方、日本の家庭科教育全体についてみると、その果たしてきた役割は大きい。社会人、高校生を対象にした調査[8)]で対象者が、家庭科は家庭生活そのものを教材とした教科であり、人が生きていく上で必要不可欠なことを総合的に学ぶ教科である、家庭科の有用性は高いと感じていることが報告されている。また、高校生への生活に関する意識調査[8)]では、高校生の自立への関心が高いことが示され、伊藤は「家庭科教育の動向」[9)]で、忘れてはいけない家庭科の役割として「自立の支援・促進」を挙げている。しかし、家庭科で課題となっている授業時間数の減少は、授業内容の縮小や学びの偏り、家庭科の専任教員の減少を招き、教員不足を免許外教員や臨時免許状教員が支えているという実態がある[10) 11)]。

その影響が小学校教員養成課程の大学 1・2 年生を対象とした基本的縫製技能調査[12)]の結果に表れている。「本返し縫い」「半返し縫い」のできない学生が 20 数%おり、「ボタン付けが得意である」学生は半数に満たない。「ボタンが取れた時」「服の裾がほつれた時」の対処方法は「家族や友達に直してもらう」が、「自分で直す」よりも多く、ボタン付けや裾直しの必要性を感じておらず、「直さずにそのまま着る」、「その服はもう着ない」という回答もあったという。それは、消費生活の問題点も垣間見える結果といえる。以上の縫製技能の実態から、家庭科教育で目指す技能の定着が達成できていない現状が明らかとされ、それは技能の習得にとどまらない可能性が高いと考える。

そこで本研究では将来、指導者となる教育学部の学生を対象に、自立度を中心とした衣生活全般に関わるアンケート調査を実施した。調査から学生の衣生活に関する実態や意識を捉え、不足する知識や必要な学びについての知見を得ることを目的とする。

2. 研究内容・方法

2.1　調査の概要と方法

2019 年 5～6 月、10～11 月に Y 大学教育学部の小学校教職科目の履修者を対象に、アンケート調査を実施した。家庭科被服領域の講義 4 回の期間中、講義途上と終了時の 2 回調査を実施し講義履修者 279 名中、170 名から有効回答(回収率 61%)を得た。4 回の講義のテーマは「衣

服の機能」「衣服材料と着心地（吸水性実験含」「衣服管理（洗濯実験含）」「環境配慮衣生活」である。講義終了後には、自身の衣生活の改善点を記述させた。アンケートは授業支援システムを利用して配布及び回収を行った。アンケート調査の分析から、学生の実態把握と必要な学びを検討する。

2.2　アンケート調査

アンケートでは、学生の特性や実態を把握するために「自立に関わる衣生活の日常行動」「ファッションに関する考え方」「衣服の購入時、着用時、廃棄時の行動」の観点から質問項目を設定し、途上のアンケートでは 48 項目、講義後は 19 項目を設定した。講義後の質問項目には、講義を受けたことによる意識変化等の影響を検証するために途上のアンケートと同じ質問項目が含まれる。考え方や意識を問う質問では、5 件法（1. 全く当てはまらない 2. あまり当てはまらない 3. どちらでもない 4. ややあてはまる 5. とても当てはまる）で回答させた。具体的な質問内容は表 1 に示す。講義後には、講義の内容を受けて自分自身の衣生活を内省させ、問題点や改善方法を自由記述で回答させた。

2.3　アンケートの分析方法

属性は、単純集計にて全体的傾向を把握した。5 件法の回答は、量的に扱える間隔尺度として扱い集計と解析を行った。学生の意識の要因を明らかにするため、探索的因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量の絶対値が 0.35 以上を示す因子を抽出した。項目間の関係の整理には相関係数を用いた。データの分析には、統計処理ソフト SPSS Ver.20.0 を使用し、有意差検定の水準を *: $p<.05$、**: $p<.01$、***: $p<.001$ として有意検定を行った。

自由記述は、記述内容をカテゴリ分類して主要な回答内容を集約整理する。

3. 結果

3.1　学生の属性と衣生活

5 件法以外の回答結果を以下に示す。学生の年齢構成は、18 歳から 20 歳までで 95%を占める（図 1）。性別構成は男子 40.6%、女子 59.4%で、現在の住まいは自宅通学生が 64.5%、下宿生が 35.5%であった。服装規範意識に影響があると考えられる高等学校通学時の服装は、制服が 91.2%、私服が 8.8%であった。大学生現在は、通学時の靴として多い方からスニーカー79.4%、ローファー14.7%であり、この 2 つで 94%を占める（図 2）。家での服装はルームウェアが 41.2%、ジャージが 29.4%、スウェットが 24.7%であり、就寝時はパジャマが 50.0%、ジャージが 27.1%、スウェットが 20.0%であった。

以上から、対象者は大学 1 年生が多くを占め、3 分の 1 強が下宿生である。大学の立地（丘の上）から通学には 8 割がスニーカーを履き、ヒールの高い靴の利用は少ない。自宅での服装はルームウェアが最も多く、就寝時はパジャマが半数であった。ジャージやスウェットの着用者は、就寝時も室内着のままで着替えはしていないと考えられた。

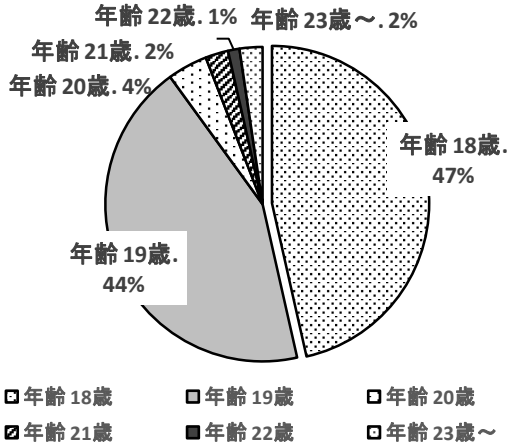


図 1　対象者の年齢構成

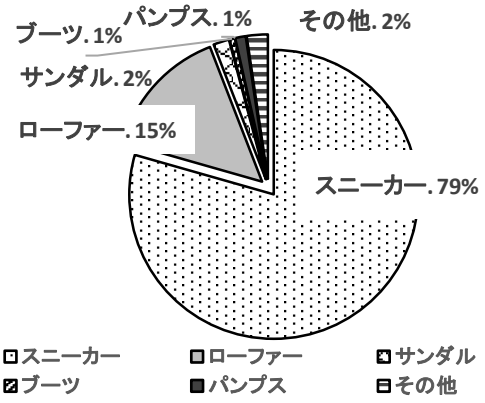


図２　通学時に履いている靴

3.2　探索的因子分析

学生の意識要因を集約、分類し相互関係を調べるために、講義途上と講義後のアンケートのうち、5 段階尺度の調査項目（途上:35 項目、講義後:19 項目）の回答について探索的因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。十分な因子負荷量を示さなかった 3 項目（0.35 未満）を分析から除外し再度因子分析を行い、最終的に妥当と考えられる 7 因子の因子得点を得た。全51項目の分散を説明する累積寄与率は55.5%となった。その因子分析結果を表 1 に示す。

第 1 因子は、服装規範や身だしなみに関わる項目で「Ⅰ 服装規範身だしなみ配慮」、第 2 因子は自分で衣服の手入れや補修を行っているかであり「Ⅱ 被服保守自立」、第 3 因子は被服の必要性やコーディネートに関する項目で「Ⅲ 被服必要性コーディネート重視」、第 4 因子は洗濯や片付けの自立に関してなので「Ⅳ 着用被服管理自立」、第 5 因子は着用時のファッションに関わる項目で「Ⅴ 機能性否定ファッション観」、第 6 因子は不要になった衣服の取扱い行動で「Ⅵ 廃棄時環境配慮」、第 7 因子は被服購入時の行動であるため「Ⅶ 被服購入時品質確認」と命名した(以後因子名を適宜ローマ数字で略す)。

3.3　7 因子の評定平均値と対象者の特徴

因子分析によって得られた 7 因子の因子項目毎の評定平均値（平均下位尺度得点）を図 3 に示し、その特徴を見る。最も高い因子は「Ⅰ 服装規範身だしなみ配慮(4.59)」であり、次に高いのは「Ⅲ 被服必要性コーディネート重視(4.12)」である。一方、「Ⅶ 被服購入時品質確認(2.92)」「Ⅴ機能性否定ファッション観 (2.98)」「Ⅵ 廃棄時環境配慮(3.01)」因子は得点が低く、3 に満たない項目もある。身だしなみや服装規範については配慮ができているものの、購入時の品質確認や廃棄時の環境配慮行動への意識が低いということが平均下位尺度得点から読み取れる。衣服の必要性を考慮した購入はできていた。また、「Ⅴ機能性否定ファッション観」が低いことは、流行にむやみに迎合せず、吟味した上での購入を心がけていると考えられ適当な行動と言えよう。

アンケートの個々の評定平均値の得点からは、高い項目順に「下着は毎日替えている(4.91)」「お葬式では派手な服装はしない(4.85)」「入学式や卒業式では普段よりきちんとした服装をする(4.82)」となり、低い項目は「暑くてもブーツを履くことがある(1.74)」「衣服を購入する時は縫い方やボタンの付け方を確認する(2.24 途上項目)」「衣服を購入する時は組成表示や取扱絵表示等で扱いやすさを確認する(2.26 途上項目)」となった。また、途上の質問項目で「不要な被服は廃品回収に出してリサイクルをしている(2.58)」も低かった。因子の評定平均値と同様の傾向と言える。

以上から、身だしなみや服装規範に関する意識は高いが、衣服の購入時の品質確認や取扱い絵表示の確認、着用後の廃棄時にリサイクルをするかの実践は不十分と見られ、流行のファッションに流されることはないものの、衣服を大切に扱う行動など、最終的には環境配慮に関わる行動への配慮が低いと見られた。

表 1 探索的因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	因子							因子名
	1	2	3	4	5	6	7	
No24 お葬式では派手な服装をしない	.913	.040	-.074	.050	-.132	.162	-.154	Ⅰ服装規範身だしなみ配慮
No25 下着は毎日替えている	.907	-.096	-.197	.081	-.045	.132	-.059	
No22 入学式や卒業式では普段よりもきちんとした服装をする	.822	.051	.018	.034	-.041	.043	-.013	
No31 運動をする時はジャージ等スポーツウエアに着替える	.785	.035	.007	.037	-.103	.097	-.061	
No19 靴は試着してサイズを確かめる	.722	-.038	.025	.001	-.078	-.099	.114	
No18 ズボンは試着してサイズを確かめる	.653	.171	.101	-.141	-.160	-.223	.126	
No27 靴をはくときは靴下を必ずはく	.498	.034	-.148	.085	.103	-.031	-.090	
No17 ジャケットは試着してサイズを確かめる	.480	-.030	.399	.008	-.172	-.264	.116	
No14 衣服を購入する時はお店で実際に現物を確認する	.473	-.168	.446	.007	-.074	-.185	.122	
No23 結婚式にはお祝いの気持ちを伝える華やかな服装をする	.424	.229	.104	.116	-.100	.154	-.077	
No21 衝動買いはしないで、数点見比べる	.369	.135	.147	-.082	-.136	.114	.119	
No30 寒い時は温かい肌着(ヒートテック等)を着る	.359	-.005	.048	.069	.138	.298	.050	
No64 ボタンつけや簡単な修繕は自分でしている	-.032	.929	.005	-.070	-.147	-.064	-.111	Ⅱ被服保守自立
No45 糸がほどけたり破れた時等は、自分で縫いなおしている	.157	.852	-.126	.019	.116	-.084	.086	
No44 ボタンが外れたら自分でつけなおしている	.143	.849	-.167	.008	.124	-.053	.051	
No62 洗剤の使用量の目安を守り、計量して使用している	.021	.496	-.002	.079	-.202	-.033	-.074	
No60 洗濯時取り扱い絵表示やデメリット表示を確かめている	-.115	.470	-.094	.141	-.069	-.012	.287	
No63 アイロンかけなどの仕上げは、自分でしている	-.218	.449	.187	.286	.069	-.053	-.177	
No42 アイロンかけ等の仕上げは自分でしている	.050	.407	-.061	.390	.218	.004	.076	
No26 タンクトップ等の肌着は必ず着る	.315	.356	-.024	-.160	.138	.060	.056	
No36 鏡で自分の服装をチェックする	.141	.138	.676	-.067	.298	-.131	-.117	Ⅲ被服必要性 コーディネート重視
No37 服装のコーディネートは鞄や靴まで考える	-.037	.021	.669	-.053	.421	.024	-.022	
No35 自分に似合う色や服装がわかる	.046	-.010	.643	.080	.227	-.005	-.065	
No20 持っている服とのコーディネートを考えて購入する	.238	-.210	.611	.115	.090	.176	-.080	
No38 服装によって気分が変わる	.093	-.050	.580	-.077	.356	.141	-.097	
No57 手持ちの衣服との組み合わせを考えてから買う	-.161	-.005	.577	.101	-.134	.112	.002	
No50 新しい被服がほしいときは、必要性をよく考える	-.091	.217	.536	-.080	-.338	.106	.007	
No51 購入する被服は、自分で店に行って決める	-.033	-.136	.520	.139	-.007	-.189	.223	
No49 手持ちの衣服とその利用状況を把握している	-.155	-.164	.416	.138	-.050	.218	.052	
No39 自分が着た服は自分で洗濯をする	.066	.057	.051	.876	.013	-.097	-.070	Ⅳ着用被服 管理自立
No59 自分が着たものは自分で洗濯している	-.242	.121	.144	.852	.007	-.180	-.068	
No40 洗われた洗濯物を干している	.211	-.086	.000	.776	-.139	.025	.103	
No41 乾いた洗濯物をたたんでいる	.182	.030	-.010	.691	-.025	.077	.208	
No58 自分が着たものは自分で片づけている	-.059	.076	.267	.593	-.058	.110	-.032	
No61 洗濯時には、ふろの残り湯を利用している	-.174	.080	.120	-.374	-.023	.179	.111	
No32 歩きにくい靴でもデザインが気に入ったらはく	-.184	-.069	.062	.054	.608	-.115	.069	Ⅴ機能性否定 ファッション観
No33 動きにくくてもスキニーパンツをはく	-.163	-.207	.126	.023	.515	.127	.065	
No29 寒くても生足を出すことがある	.024	.227	.123	-.290	.469	.061	.004	
No28 暑くてもブーツをはくことがある	-.090	.196	.047	-.088	.469	-.134	-.039	
No56 ブランド品や流行の被服は、むやみに買わない	-.007	.188	.053	-.059	-.461	.255	-.073	
No55 衝動買いはしないで、品質や価格を数点で見比べる	.005	.340	.247	.063	-.349	.169	-.032	
No47 不要な被服は、ﾘﾌｫｰﾑやﾌﾘｰﾏｰｹｯﾄ等、再利用している	.149	-.051	.018	-.040	.050	.714	.094	Ⅵ廃棄時 環境配慮
No48 不要な被服は、廃品回収に出してリサイクルしている	.058	-.087	-.006	-.011	.110	.698	.078	
No66 不要な被服は、ﾘﾌｫｰﾑや譲るなどして再利用している	.017	.059	.048	-.043	-.315	.558	-.056	
No67 不要な被服は、廃品回収に出してリサイクルをしている	-.020	-.183	.093	-.110	-.302	.543	.037	
No15 衣服購入時は組成表示や取扱絵表示等で取扱を確認する	.070	-.103	-.038	.037	.160	.079	.754	Ⅶ被服購入時 品質確認
No53 購入時、組成表示や取り扱い絵表示等で取扱を確認する	-.167	.157	-.095	.075	-.207	.107	.526	
No16 衣服を購入時は縫い方やボタンの付け方等を確認する	-.113	.182	.120	-.026	.331	.191	.504	
No52 購入する時、必ず試着してサイズや着心地を確かめる	.057	-.109	.168	-.162	-.149	-.216	.463	
No54 購入時、縫い方やボタンのつけ方などを確かめる	-.232	.184	.072	-.007	-.061	.234	.400	
No43 セーター等のニット製品はクリーニングに出している	.103	-.035	-.006	.106	.309	.140	.392	

※　No14～No48 は途上の項目、No49～No67 は講義後の項目

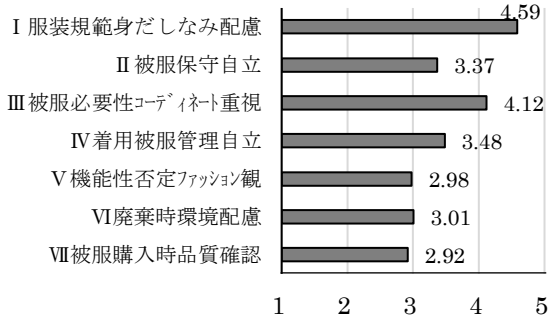


図３　７因子の平均下位尺度得点

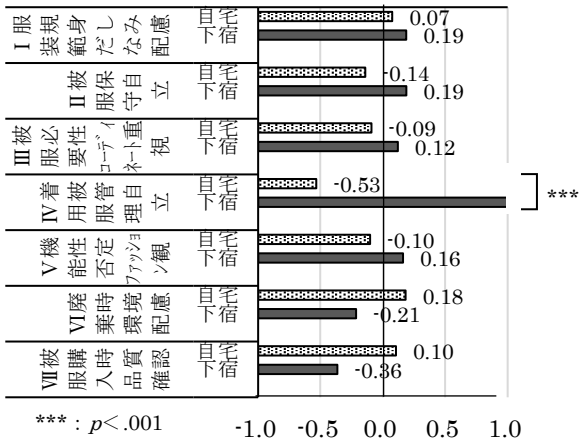


図４　７因子の因子得点の自宅・下宿の差

3.4　７因子の因子得点の性差、自宅下宿間差

７ 因子の因子得点を用いて男女間の性差について t 検定を行った。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ因子において男女の有意差(0.1%水準、1%水準)が認められ、女子の方が高かった。しかし、「Ⅳ 着用被服管理自立」では、有意差はないが女子より男子の得点が高かった。洗濯等の管理は男子の方が実践していることになる。これは、男女間の要因ではなく現在の住まいが自宅か下宿であるかによるものと推察される。そこで、７因子を自宅生、下宿生について t 検定を行い、有意差を求めた。その結果を図４(因子得点の０が回答者の平均値である）に示す。「Ⅳ 着用被服管理自立」においてのみ有意差が認められ、下宿生の被服管理の自立が有意(0.1%水準)に高いことが示された。

以上から７因子について、服装規範や身だしなみ、被服の保守、被服の必要性の考慮、ファッション重視に関しては女子が有意に高く、洗濯実践等の自立に関しては下宿生が有意に高いことがわかり、被服管理自立は性別ではなく自宅か下宿であるかが影響を与えていることが明らかとなった。下宿生は当事者意識が高く自立できているのに対し、自宅生は洗濯実践等を同居する家族に依存し自立意識が低いと考えられた。

3.5　７因子の４属性間における差

次に性別と自宅下宿生を相互に組み合わせた属性による相違を検証する。４属性の割合は「男子自宅(28.6%)」「男子下宿(14.3%)」「女子自宅(39.0%)」「女子下宿(18.2%)」となった。７因子の分散分析による検定の結果を図５に示す。

「Ⅳ 着用被服管理自立」は、４属性すべてで有意差(0.1%水準)が認められ、下宿生の自立度

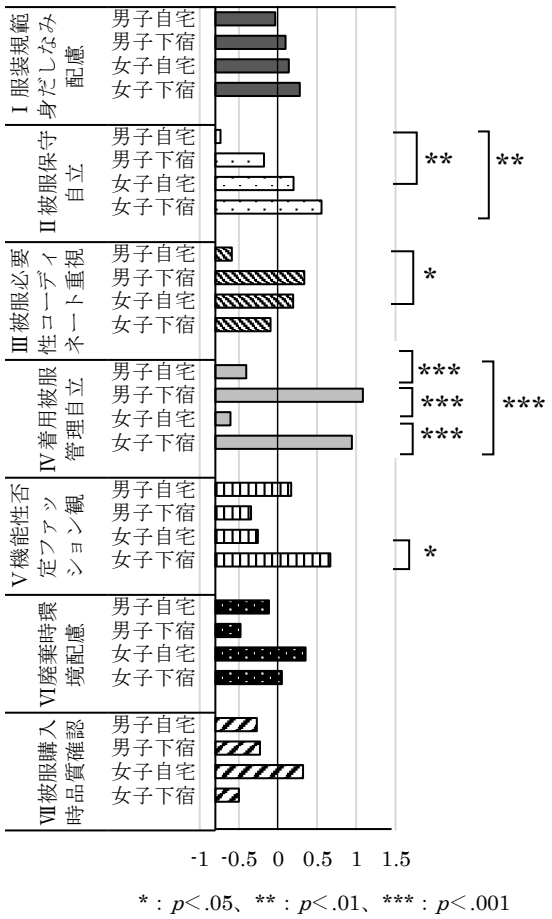


図５　因子得点の属性による分散分析

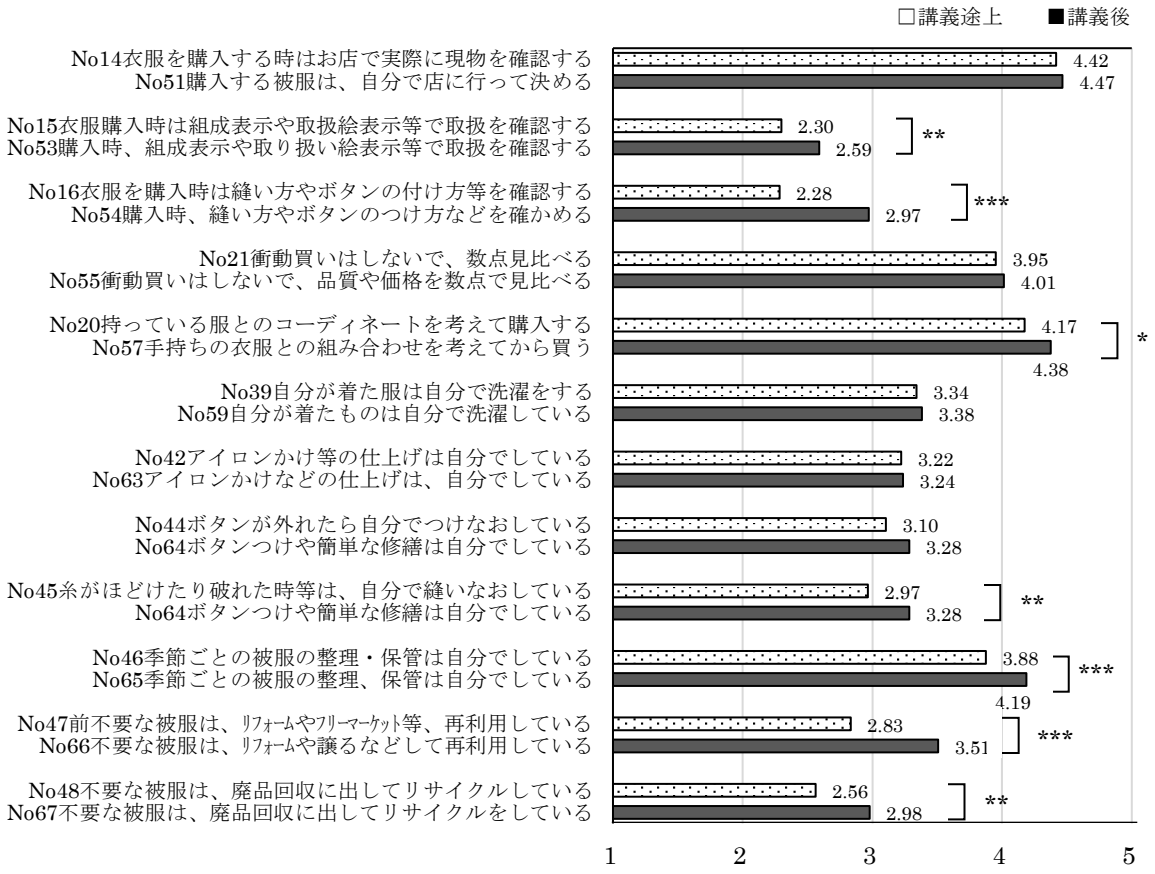
が高い。一方、取れたボタンをつける、繕い物をする等の補修技能の「Ⅱ 被服保守自立」は、自宅、下宿の女子両方が男子自宅生より有意(1%水準)に高くなった。男子下宿生は、洗濯等は自立していたが保守は女子より低い。自立意識は高くても補修技能が伴わず被服保守が低いと推察され、技能面での課題があると考えられた。

女子の自宅下宿生間では、女子下宿生の「Ⅴ機能性否定型ファッション観」は自宅女子生より有意(1%水準)に高い。一方、品質確認や環境配慮意識は女子下宿生の方が低かった。しかし、被服の管理・保守の自立度が有意に高いことを考え合わせると、下宿生は実家を離れ家事全般を担い、全ての判断を自分で決定し行動するという自立の過程で、流行のファッションにも興味を高めたのではないかと考えられた。

3.6 講義途上と講義後の意識の変化

講義途上と講義後の変化を t 検定により平均値を比較した。その結果を図 6 に示す。

全てのペアで講義途上よりも講義後に平均値が上昇し、12 ペア中 7 ペアで有意な差が認められた。途上で意識の低かった、購入時品質確認に関する 2 組のペアは有意(0.1%水準、1%水準)に上昇した。着用しなくなった被服のリサイクルや廃品回収の環境配慮 2 組も、有意(0.1%水準、1%水準)に上昇し、知識を獲得した効果があったと考えられるが、十分高いとまでは言えない。被服の洗濯、手入れは有意差がなく家族への依存度はあまり変化していないようだ。補修に関しては、破れた被服の繕いについて有意差が見られたが、取れたボタン付けは有意な変化は見られない。意識の変化があっても技能がなければ実践できないためと考えられる。



*：p<.05、**：p<.01、***：p<.001

図 6 講義途上と講義後の意識の変化

程度に差はあるものの全てのペアで講義後に意識変化の上昇が見られた。回数の少ない講義であっても学生の意識変容を促す効果が認められた。高校生までの家庭科の授業で学習した知識は十分定着しておらず、家族と同居の学生は自立も進んでいないことが明らかとなった。また、自立が高い学生でも、補修に必要な技能がないと実践を伴うことはできない。将来教員として指導者になるためだけでなく、一生活者として、自立した社会人となるためには、本調査で問うた内容は必要な能力である。学校教育、家庭科教育で定着させることを目指したい。

3.7　7因子間の相互関係

因子間の相関分析の結果をもとにモデルを作成し、共分散分析（パス解析）によって 7 因子間の相互関係を検討した。7 因子のうち他の因子と相関の見られなかった「Ⅴ機能性否定型ファッション観」を除いた 6 因子を潜在変数とし、各変数を構成する質問項目を観測変数として解析を行った。その結果を図 7 に示す。パス解析の適合度指数は、GFI=0.753、AGFI＝0.717、RMSEA=0.088 を示した。潜在変数から観測変数へのパス係数(図中のパス係数は煩雑さを考慮して省略)はすべて有意(0.1%水準)となった。

ⅢからⅠ、Ⅱ、Ⅶへの相関が有意に高く（0.1%、1%水準)、ⅣからⅡ、ⅡからⅦ、ⅦからⅥも有意に高い（0.1%水準)。Ⅲの被服の必要性やコーディネートに配慮できる人は、Ⅰの服装規範や身だしなみに配慮でき、Ⅱの自分で被服の保守を行い、Ⅶの被服の購入時に品質の確認をする意識と繋がる。そして、Ⅶの意識は、Ⅵの被服の廃棄時に環境に配慮できる意識にも深く関係していた。一方、下宿生が高い洗濯の自立のようなⅣの着用した被服の管理を行うことは、Ⅱの被服の保守自立を促す。ⅡからⅦへのパスを意識づけさせると購入時の品質管理意識を高め、環境配慮の意識に影響する間接的な効果となり、物を大切にする意識喚起につながる。

以上から、着用時にアイロンかけ、ボタン付け、修繕を自分で行い、さらに廃棄時にはリフォームやリサイクル、廃品回収への意識が高く行動も伴う人は購入時に縫い方やボタンの付け方、組成表示や取扱い絵表示を確認するように

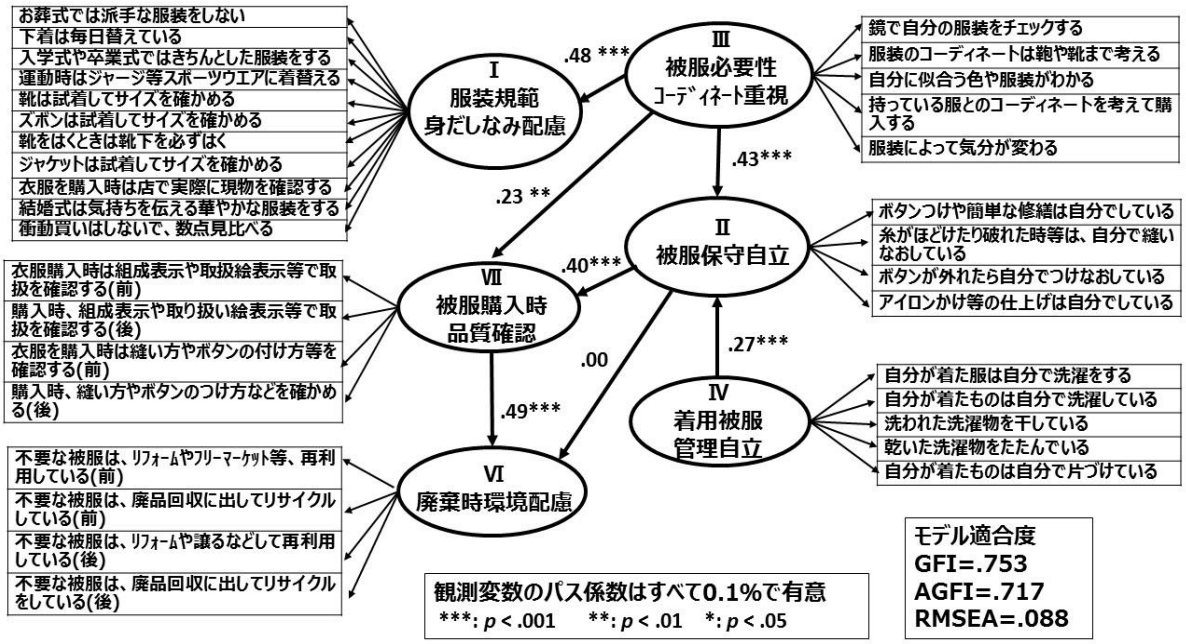


図 7　6 因子間の共分散分析パス図

なると考えらえる。洗濯物を洗う、干す、たたむ等の自立を促す教育に加えて、Ⅶの被服の購入時に品質確認ができることから、Ⅱの保守やⅥの廃棄時に環境に配慮する意識を高めていくことを目指す教育が効果的であり重要になると考えられた。

3.8　講義後の自由記述

講義後のアンケートでは、衣生活における自身の改善点を記述させた。その記述内容を①被服購入時、②着用時管理、③着用時保守、④環境配慮 に分類して主要な回答を集約した。その結果を表 2 に示す。

5 件法によるアンケートの結果と同様の結果となり、知識の不足と意識の低さ、技能の低さが現れていた。環境配慮に関してゴミの分別やペットボトルのリサイクル等への配慮意識はあったが、衣類も資源であることには無頓着、無関心であった。講義によって被服購入時の行動が最終的な廃棄の行方にまで影響を及ぼし繋がっていることに気づき驚いていた。例えば、繊維や素材の知識がないため、組成表示を見ても意味することを読み取れないため正しい扱いがわからない。よって洗濯時の配慮ができず、被服が長持ちせず廃棄衣料にしてしまうことがある。また、2016 年に改訂された取扱い絵表示について認識がなく、絵表示を読み取ることもできない。運動時または保温したいときの素材選びが間違っていた例もある。講義によって、材料の知識、洗濯の知識、リサイクル等の環境に関する知識を学び意識を変化させることができていた。

自宅生と下宿生の自立度を比較すると、生活の全てを自分で行う下宿生は、一人暮らしにより自身の成長を感じていたのに対し、自宅生は自立意識が低く衣服管理、保守とも同居家族任せであった。しかし、保守に関しては自立意識が高くても技能が伴わないと実際に補修は行えない。技能の向上は家庭科授業で目指すところであるが、現在の限られた時間数の家庭科の授業だけで身につけることは困難である。繰り返しの練習が足りず身についていない学生が多い。

表 2　自由記述

	これまでの行動	行っていなかった行動		その結果	今後の実践
①被服購入時	デザイン重視 サイズ確認 価格重視 着心地確認	組成表示確認 取扱い絵表示確認 縫い方やボタン，ほつれ確認	表示の意味わからなかった 必要性にも気づかなかった	家庭で洗濯できない服の購入 シワ付きやすい 日陰干しの必要性気づかず傷める等	これまでの行動に加え、ラベル等で服の特性を確認し、用途にあったものを購入
②着用時管理	自宅生→洗濯は親任せ 下宿生→洗濯手入れは自立	洗剤の適正な使用量 最適な水温 残り湯の使用	洗剤は多いほど汚れが落ちると思っていた 残り湯は汚いと思っていた	衣服を傷め長持ちしない 水の使用量や質等の環境に悪影響	自宅生→洗濯アイロン等、まずは自立 知識を深め環境配慮を意識した行動
③着用時保守	ほころびの修繕やボタン付けを人任せ→特に男子に多い	負のループに陥る 試しても手間取りうまく行かない→やる気をなくす→面倒→やらない		修繕しないで廃棄することも	実践するために技能の向上の必要性を実感
④環境配慮	知り合いに譲る 廃棄する 衣類のリサイクルに無関心	廃品回収に出す リサイクルショップ等に出し海外に送る リメイク等	廃品回収で再利用できることを知らない 環境に配慮した新繊維の知識無	資源の無駄遣い 環境への悪影響	廃棄する衣料を減らし長持ちさせることの重要性に気づいた 知識を増やし再資源化への実践行動

自由記述の 4 分類で環境配慮は意識改革が最も必要な領域と言える。環境問題は地球規模の問題であり、身近な自分の行動と結びつけて考えることが難しい。一人ひとりの行動に起因していることを意識させることが必要となる。その上で、必要な知識を身につけていかなければ正しい行動に移せない。学校教育の中で生徒たちに関心を持たせ意識づけさせたい。

講義により意識の変容が見られた学生の記述を抜粋する。「講義を受けるまでは、大学で家庭科を扱うことがあまり理解できなかった。しかし、講義を重ねるごとに生活と密接な関係にあるにも関わらず、自分が如何に無知であるかが痛いほど感じられた。衣服分野だけでなく別の分野でも知らない事ばかりであろう。家庭科の意義を十分に理解し、正しい知識を蓄え、将来教員になった時に役立てるように今後の講義も受講していきたいと強く思っている。」「何を改善していかねばならないかわかったこと自体が、今回の講義で学んだ私のこれからの衣生活に関して重要なことであると思う。」「自らの意識改革だった。環境にも家族にも配慮した、自分にできる衣生活を目指してこれから行動していきたい。」「環境問題が自分たちの問題であるという意識が薄く、衣生活における環境配慮についても考えたことがなかった。」以上のように、衣生活で意識させたい事柄は、日常の生活では見過ごされてしまいがちである。気づくこと、気づかせることが必要となるが、多くの学生がそのことに気づいていないという実態が明らかとなった。家庭科がそれを担っていくことが求められる。

4　考察

自立度を中心とした衣生活全般に関わるアンケート調査の 7 因子間の相関を再度見直すと、「Ⅳ 着用被服管理自立」から「Ⅱ 被服保守自立」「Ⅶ 被服購入時品質確認」「Ⅵ 廃棄時環境配慮」へと高い相関を示していた。それは、洗濯の自立のような着用した被服の管理から着用後にはアイロンかけ、ボタン付け、修繕等を自分で行うこと、さらに被服購入時に縫い方やボタンの付け方、組成表示や取扱い絵表示を確認して購入できることが、廃棄時にはリフォームやリサイクル、廃品回収への意識が高くなり行動も伴っていくことを意味していた。家庭科教育の衣生活領域で被服購入時から着用時の管理・保守、環境配慮までをトータルに学ばせることが、学習内容の深まりと実践に繋がる学習となる。それぞれの学習のつながりを常に意識しながら、知識・技能の理解と習得をさせ、得られた知識・技能を自立した生活へ活用するような意識変容を目指す。そうした学習をさせることが重要であると考える。

5. 結論

本研究では将来、現場の教員となる教育学部の学生を対象に、自立度を中心とした衣生活全般に関わるアンケート調査を実施した。衣生活に関する実態や意識を捉え、不足する知識や必要な学びについての知見を得ることを目的とした。結果は次の通りとなった。

服装規範に関する項目は得点が高いが、購入時の品質表示、取り扱い絵表示確認、廃棄時のリサイクル行動は得点が低かった。5 件法による質問項目の因子分析によって、被服規範やファッション意識、被服購入時行動、保守や管理の自立、環境配慮意識等の 7 因子が抽出された。7 因子中 6 因子間の相関は高く、特に「被服購入時品質確認」「廃棄時環境配慮」「被服保守自立」は相関も高く、学生に身に付けさせたい能力として重要であった。洗濯実践等の「着用被服管理自立」は男女差よりも当事者意識が高い下宿生の自立度が有意に高かった。補修技能が必要な「被服保守自立」は自宅生女子が自宅生男子よりも有意に自立が高かった。講義途上と講義後の比較では、講義後に全ての質問項目で平均値が上昇し、講義により意識変容されたことが明らか

となった。

衣生活での改善点を問うた自由記述には、素材や洗濯に関する知識の乏しさ、当事者意識の低さ、そして補修技能の低さが記述されていた。自立した衣生活と環境配慮まで意識した被服行動の実践を促すには、衣生活全般をトータルに見渡した視点を持った学習、衣生活に対する関心を高め、深い知識と当事者意識、技能を向上させる学習が重要であり、それは講義によって可能であることが示された。

謝辞

本研究のアンケート調査に当たり、ご協力いただいた横浜国立大学教育学部の学生に心から感謝申し上げる。

【参考・引用文献】

1) 文部科学省 小学校学習指導要領平成29年告示。2017.
2) 文部科学省 中学校学習指導要領平成29年告示。2017.
3) 文部科学省 高等学校学習指導要領平成30年告示。2018.
4) 小学校学習指導要領等比較対照表 https://www.mext.go.jp/content/1384661_4_1_1.pdf
5) 中学校学習指導要領等比較対照表 https://www.mext.go.jp/content/1384661_5_1_2_1.pdf
6) 高等学校学習指導要領等比較対照表 https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/19/1407085_14_01.pdf
7) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/12/12/1380468_3_4_3.pdf
8) 日本家庭科教育学会．未来の生活をつくる．明治図書．2019.
9) 伊藤葉子．家庭科教育の動向．日本家政学会誌．2019，70(12)，845-848.
10) 伊藤葉子．家庭科の学習指導要領改訂(2017年告示)に向けて．日本家庭科教育学会誌．2018，60(4)，207-210.
11) 伊藤葉子．家庭科の授業時間減少をめぐる課題. 日本家政学会誌. 2013, 64(8), 451-453.
12) 伊藤孝子．小学校教員養成課程における教科指導力の育成. 滋賀文教短期大学紀要. 2020, 22，39-53.